

## 名護屋城(名護屋御旅館)(国の特別史跡, 百名城)(唐津市鎮西町名護屋)

名護屋城(なごやじょう)は、肥前国松浦郡名護屋(現在の佐賀県唐津市(旧東松浦郡鎮西町・呼子町)、東松浦郡玄海町)にあった城。豊臣秀吉の文禄・慶長の役に際し築かれた。国の特別史跡に指定されている。平成18年(2006年)には日本100名城(87番)に選定された。

### 概要

名護屋(古くは名久野)は海岸線沿いに細長く広がる松浦郡の北東部の小さな湾内に位置し、中世には松浦党の交易拠点の一つであった。ここにはもともと松浦党の旗頭・波多氏の一族である名護屋氏の居城、垣添城があったが、豊臣秀吉は大陸への進攻を企図した際、ここを前線基地として大掛かりな築城を行った。

名護屋城は波戸岬の丘陵(標高約90メートルほど)を中心に170,000平方メートルにわたり築かれた平山城の陣城である。五重天守や御殿が建てられ、周囲約3キロメートル内に120カ所ほどの陣屋がおかれた。城の周囲には城下町が築かれ、最盛期には人口10万人を超えるほど繁栄した。

秀吉の死後、大陸進攻が中止されたために城は廃城となったと考えられており、建物は寺沢広高によって唐津城に移築されたと伝わる。石垣も江戸時代の島原の乱の後に一揆などの立て籠もりを防ぐ目的で要所が破却され、現在は部分が残る。歴史上人為的に破却された城跡であり、破却箇所の状況が復元保存されている。

- 大正15年(1926年)11月4日、「名護屋城跡並陣跡(なごやじょうあとならびにじんあと)」として国の史跡に指定される。
- 昭和30年(1955年)8月22日特別史跡に指定された。
- 平成18年(2006年)4月6日、日本100名城(87番)に選定され、平成19年(2007年)6月から全国規模の日本100名城スタンプラリーが開始された。

黒澤明監督による『乱』(昭和60年(1985年)公開)のロケ地の一つに、名護屋城が選ばれ撮影が行われた。

### 名称

史跡名称は、「名護屋城跡並陣跡」であるが、鎮西町教育委員会の堀苑孝志は、陣跡以外の遺物や遺跡の様子から、より包括的な名称として「肥前名護屋軍事都市遺跡」という名称を提唱している。

### 歴史・沿革

#### 背景

天正15年(1587年)6月、豊臣秀吉は九州平定(九州征伐)をすると、天正17年(1589年)、奥州伊達政宗、翌年北条氏直を降し(小田原征伐)、徳川家康を関東に移封し天下統一をなした。国内統一を果たした秀吉は、世界に目を転じた。「高麗」つまり李氏朝鮮に、服属と明侵攻への協力を要請したが、朝鮮は拒絶した。その後も対馬の宗義調らが複数の交渉を重ねるが、朝鮮は拒絶の意志を変えなかった。なお秀吉は同様に琉球やルソンや高山国(台湾)にも使者を出した。

#### 築城

宗義智から交渉決裂を聞いた秀吉は、天正19年(1591年)8月、「唐入り」を翌年春に決行することを全国に告げ、肥前の名護屋に前線基地としての城築造を九州の大名に命じた。秀吉は自分の地元名古屋と同じナゴヤという地名を奇遇に感じ、城の立つ山の名前が勝男山と縁起がいいことにも気を良くしこの地への築城を決めたのだが、この地の領主であった波多親はこれに反対したため不興をかった。また甥の内大臣豊臣秀次に閼白を譲って自らは太閤となった。9月、平戸城主松浦鎮信に命じて壱岐の風本に城を築かせた。その築城の担当は、平戸城主松浦鎮信、日野江城主有馬晴信、大村城主大村喜前、五島城主五島純

玄であった(宇久純玄はこの年、姓を五島に改める)。なお、城跡から出土した瓦に「天正十八年」の銘があるものが発見された事から、築城開始時期が通説の天正 19 年より早かった可能性も考えられている。10 月上旬、全国の諸大名が名護屋へ到着し、城普請に取掛かった。『松浦古事記』によれば、20 万 5570 あまりの兵が高麗へ渡り、名護屋在陣は 10 万 2415 兵で、総計 30 万 7985 兵で陣立てされた。加藤清正、寺沢広高が名護屋城の普請奉行となった。九州の諸大名を中心に動員し、突貫工事で 8 か月後の文禄元年(1592 年)3 月に完成した。規模は当時の城郭では大坂城に次ぐ広大なものであった。ルイス・フロイスが「あらゆる人手を欠いた荒れ地」と評した名護屋には、全国より大名衆が集結し、「野も山も空いたところがない」と水戸の平塚滝俊が書状に記している。唐入りの期間は、肥前名護屋は日本の政治経済の中心となった。

#### 作事衆

築城にあたっては本丸数寄屋や旅館などの作事奉行を長谷川宗仁が担当した。大手門は御牧勘兵衛尉が担当し、各所の建築が分担された。

#### 構造

本丸・二の丸・三の丸・山里曲輪などを配し、本丸北西隅に 5 重 7 階の天守が築かれた。城跡からは金箔を施した瓦が出土しており、天守に葺かれていたものと考えられている。城郭の周辺には各大名の陣屋が配置された。

- 本丸は東西五十六間、南北六十一間、総高さ三十二間一尺五寸であった。
- 乾の角に天守台があり、高さ十五間。海より池まで十二間一尺、池より三の丸まで十四間三尺五寸。三の丸より本丸まで五間三尺五寸、以上右高さ也。池の長さ百六十三間也、巾十一間より三十一間までであった。
- 二ノ丸は、東西四十五間、南北五十九間。
- 遊撃曲輪は、東西廿六間、南北二十四間。
- 弾正曲輪は長さ九十五間、横四十五間又三十間。
- 水ノ手曲輪は十五間四方。
- 山里曲輪は東西百八十間、南北五十間横二十間四方。
- 城の廻りは十五町、城への入口は五ヶ所あり、大手門、西ノ門、北ノ門、舟手門、山里通用門だった。
- 三ノ丸は、東西三十四間、南北六十二間。
- このほか、腰曲輪・小曲輪・合而十一曲輪であった。

#### 出兵後

西国衆を中心に総勢 15 万 8000 の兵が 9 軍に編成され、4 月 1 日(5 月 12 日)に小西行長・宗義智率いる第一陣が朝鮮半島へ出兵したのを皮切りに、名護屋を出発した諸隊は壱岐・対馬を経て朝鮮に渡っていった。秀吉は京都聚楽第を 3 月 26 日(5 月 7 日)に出発し 4 月 25 日(6 月 5 日)に当地に到着している。以後大政所の危篤時を除いてこの地が本営となる。在城中、秀吉は渡海した諸将に指示を出す一方で、山里曲輪に築いた茶室で茶会を楽しんだり、瓜畑で仮装大会を催したりした。文禄の役では最終的に 20 万以上の兵が名護屋から朝鮮に渡った。当地には西国衆の渡海後も東国衆と秀吉旗本衆約 10 万の兵が駐屯している。多くの人員を養うには水源が足りなかったようで、水不足が原因の喧嘩が絶えなかったという。

朝鮮半島で戦線が膠着すると、翌文禄 2 年(1593 年)4 月には講和交渉が開始されるが、交渉が破談すると秀吉は、再び慶長 2 年(1597 年)2 月から 14 万人を朝鮮半島へと上陸させた。

この慶長の役でも、補給・連絡の中継地として名護屋は重要な役割を果たした。慶長 3 年 8 月 18 日(1598 年 9 月 18 日)、秀吉が没したために全軍撤収し名護屋城もその役割を終えた。出兵の期間中、秀吉が当城に滞在したのは延べ 1 年 2 か月であった。

